
鬼殺し

イスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼殺し

【著者名】

イスカ

【ZPDF】

Z0709B

【あらすじ】

……はあ。何故俺がこんな場所に居るんだ。静かに暮らしたかったのだがなあ。だが、来てしまった物はしじうがない。早々と終わらせ、帰るとしようじゃないか。あの鬼共に勝てるかは、わからないのだが。

「素直に白状しよう。俺は今、帰ることしか考えていない」

互いの輪郭を確認する事さえ危うい暗闇の中で、俺はゆっくりと呟いた。

今まで俺と旅を共にしてきた仲間達がその言葉を聞き、驚いたようには息を呑む。

長旅を共にしてきたせいなのだろうか。

俺の脳裏に、彼らが目を丸くした様子が糸もたやすく、かつ鮮明に映し出される。

……。弱音を吐いたつてしまふがないじゃないか。

だつて俺達は今、敵陣の真っ只中だぞ？

そう、現在俺達は、数々の暴虐を行つ悪人達を懲らしめる為、敵の拠点へ攻めにきているのだ。

断崖絶壁。孤立無援。

そんな言葉がお似合いだろうか。

俺達は先程まで、激しくうねる白波と、それに揺られ、浮かんでいる小船の目の前にいた。

この小船は俺達が本土から乗つてきたものだ。

俺達が乗つたときには新品同然で、どこにも問題がなかったこの小船だが、今は、所々にひびが入り、無残な体を俺達に晒している。敵の拠点とは、船をここまで完膚無きに破壊するほど、気性の激しい海。その真ん中にボツンと浮かんでいる、この孤島なのだ。まず、増援を呼ぶことは難しい。いや、ほとんど不可能に近いだろう。

先にも言った通り周りは潮の流れが激しい海に囲まれている。

俺達が本土からこちらへ渡るのに三日。

今から増援を呼んだところで、来るのには早くても一日、遅ければそれ以上の日数が経ってしまう。

三日もあれば俺達も見つかってしまうだろうし、見つからなかつたとしてもそれに耐えうるだけの食料も持ち合わせてはいない。まあ、しかし、通信手段という概念自体が今の俺達には欠如しているのだけれど。

ここで俺の頭上に疑問符が置かれる事になった。

敵さんは何故この様な場所を拠点に選んだのだろう？
こんな食料を調達する事さえままならない場所に……。

……。理由等、特別無いのかもしれない。

今、戦おうとしている敵は、人外の者達なのだから。

その、人外、という事実が俺のやる気のなさに大きく拍車をかけている。

人外。

口に出すのは容易いが、人外とはその字の如く、人から外れたものを指す。

それは身近な所では獸であり。
もつと上へ行けば神だつたりする。

そして、俺達が今回相手にする敵、とは 鬼、なのである。

鬼、鬼。鬼。鬼。鬼。オニ。おに鬼おにオニオニ鬼……鬼。

屈強な肉体を持ち、人間等一撃で屠るであろう、人外の者が、俺達の近くに居るのだ。

どんなに肝がすわった人間でも 帰りたいと糞うのが常であるう。

だが、俺は帰らない。否、帰れないのだ。

このままむざむざと何の成果もあげれずに帰つた所で、再度この牢獄に送られるであるう。

俺が、桃太郎と呼ばれている限り幾度でも、死地へ向かわされるであろう。

俺は桃太郎なのだ。

鬼と戦わさせられるのにこれ程の理由は無いだろう。

俺は生まれるべくして生まれた、勇者。英雄。

人権などお構いなしだ。

だが、しかし、今ここでぐちぐちと文句を言つぼど俺も馬鹿ではない。

さつさと終わらせてさつさと帰らうじゃないか。

鬼を倒し、無事に帰れるかどうかは、甚だ疑問ではあるのだけれど。

「……文句を言つてもしようがないか。行くぞ、お前達。俺が言えた事ではないだろうが、恐怖に慄いている訳ではないのだろう?」

俺はニヤリと、あまり上品ではない笑みを浮かべ、仲間達に声をかけた。

猿。戌。雉。

数少ない仲間。

信頼出来る仲間。

これから死線を共に潜り抜けるであろう 仲間。

勇者に与えられた仲間が人間でさえない事には笑いが零れるが。しかし彼らは最高だ。

俺の言葉を聞き、俺の表情を、見れないながらも察し、彼らは一斉に声を張つた。

無論だ、と。

ククク、やはり最高だ。

俺はくつくつと喉を鳴らす。

最高の仲間に囲まれた俺は、やはり最高なのだろうな。しばし、そんな考えを頭の中で咀嚼し、しかし取り扱う。そう、判断する基準も、さしたる確証も無いか……。

そうして俺は、否、俺達は一步踏み出した。
目前には毒虫のように派手派手しく彩られた鬼達が、数人たむろ
している。

俺はゆっくりと鞘から剣を抜き放ち、構えた。

猿は姿勢を低くし、突撃の準備を。

戌は牙を剥き出しにし、攻撃の準備を。

雉は羽を羽ばたかせ、滑空の準備を。

さあ、行こうじゃないか。

一步。

又一步。

そして、一步。

徐々に動くスピードを速くしながら俺達は突撃する。

鬼達も気づいたようだ。こちらを一瞥し、自分の武器
棒と言えばいいのか を手にする。

鉄の棍

そして、激突した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0709b/>

鬼殺し

2010年11月27日16時30分発行